入社の辞

夏目漱石

大学を辞して朝日新聞に這入ったら逢う人が皆驚いた顔をして居る。中には何故だと聞くものがある。大決断だと褒めるものがある。大学をやめて新聞屋になる事が左程に不思議な現象とは思わなかった。余が新聞屋として成功するかせぬかは固より疑問である。成功せぬ事を予期して十余年の径路を一朝に転じたのを無謀だと云って驚くなら尤である。かく申す本人すら其の点に就ては驚いて居る。然しながら大学の様な栄誉ある位置を抛って、新聞屋になったから驚くと云うならば、やめて貰いたい。大学は名誉ある学者の

巣を喰っている所かも知れない。尊敬に価する教授や博士が穴籠（あなごも）りをしている所かも知れない。二三十年辛抱（しんぼう）すれば勅任官になれる所かも知れない。其他色々便宜（べんぎ）のある所かも知れない。成程（なるほど）そう考えて見ると結構な所である。赤門を潜（もぐ）り込んで、講座へ這（は）い上ろうとする候補者は——勘定（かんじょう）して見ないから、幾人あるか分らないが、一々聞いて歩いたら余程（よほど）ひまを潰（つぶ）す位に多いだろう。大学の結構な事は夫（それ）でも分る。余も至極（しごく）御同意である。然（しか）し御同意と云うのは大学が結構な所であると云う事に御同意を表したのみで、新聞屋が不結構な職業であると云う事に賛成の意を表したん

だと早合点をしてはいけない。

新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。商売でなければ、教授や博士になりたがる必要はなかろう。月俸を上げてもらう必要はなかろう。勅任官になる必要はなかろう。新聞が商売である如く大学も商売である。新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。只個人として営業しているのと、御上で御営業になるのとの差丈けである。

大学では四年間講義をした。特別の恩命を以て洋行を仰つけられた二年の倍を義務年限とすると此四月で丁度年期はあける訳になる。年期はあけても食えな

ければ、いつ迄（まで）も噛（かじ）り付き、獅噛（しが）みつき、死んでも離れない積（つもり）でもあった。所へ突然朝日新聞から入社せぬかと云う相談を受けた。担任の仕事はと聞くと只（ただ）文芸に関する作物を適宜（てきぎ）の量に適宜の時に供給すればよいとの事である。文芸上の述作を生命とする余にとって是程（これほど）難有（ありがた）い事はない、是程心持ちのよい待遇はない、是程名誉な職業はない、成功するか、しないか抔（など）と考えて居られるものじゃない。博士や教授や勅任官抔（など）の事を念頭にかけて、うんうん、きゅうきゅう云っていられるものじゃない。

大学で講義をするときは、いつでも犬が吠（ほ）えて不愉

快であった。余の講義のまずかったのも半分は此犬の為めである。学力が足らないからだ抔(など)とは決して思わない。学生には御気の毒であるが、全く犬の所為(せい)だから、不平は其方(そちら)へ持って行って頂きたい。

大学で一番心持ちの善(よ)かったのは図書館の閲覧室で新着の雑誌抔(など)を見る時であった。然し多忙で思う様に之(これ)を利用する事が出来なかったのは残念至極(しごく)である。しかも余が閲覧室へ這入(はい)ると隣室に居る館員が、無暗(むやみ)に大きな声で話をする、笑う、ふざける。清興を妨げる事は莫大(ばくだい)であった。ある時余は坪井学長に書面を奉(たてまつっ)て、恐れながら御成敗を願った。学長は取り合

われなかった。余の講義のまずかったのは半分は是(これ)が為めである。学生には御気の毒だが、図書館と学長がわるいのだから、不平があるなら其方(そっち)へ持って行って貰いたい。余の学力が足らんのだと思われては甚(はなは)だ迷惑である。

新聞の方では社へ出る必要はないと云う。毎日書斎で用事をすれば夫(それ)で済むのである。余の居宅の近所にも犬は大分居る、図書館員の様に騒ぐものも出て来るに相違ない。然しそれは朝日新聞とは何等の関係もない事だ。いくら不愉快でも、妨害になっても、新聞に対しては面白く仕事が出来る。雇人が雇主に対して面

白く仕事が出来れば、是が真正の結構と云うものである。

大学では講師として年俸八百円を頂戴(ちょうだい)していた。子供が多くて、家賃が高くて八百円では到底(とうてい)暮せない。仕方がないから他に二三軒の学校を馳(かけ)あるいて、漸(ようや)く其日を送って居た。いかな漱石もこう奔命につかれては神経衰弱になる。其上多少の述作はやらなければならない。酔興(すいきょう)に述作をするからだと云うなら云わせて置くが、近来の漱石は何か書かないと生きている気がしないのである。夫丈(それだ)けではない。教える為め、又は修養の為め書物も読まなければ世間へ対して面目

がない。漱石は以上の事情によって神経衰弱に陥(おちい)ったのである。

新聞社の方では教師としてかせぐ事を禁じられた。其代り米塩(べいえん)の資に窮せぬ位の給料をくれる。食ってさえ行かれれば何を苦しんでザットのイットのを振り廻す必要があろう。やめるとなと云ってもやめて仕舞(しま)う。休(や)めた翌日から急に脊中(せなか)が軽くなって、肺臓に未曾有(みぞう)の多量な空気が這入(はい)って来た。

学校をやめてから、京都へ遊びに行った。其地で故旧と会して、野に山に寺に社に、いずれも教場よりは愉快であった。鶯(うぐいす)は身を逆(さかし)まにして初音(はつね)を張る。

余は心を空にして四年来の塵（ちり）を肺の奥から吐き出した。是（これ）も新聞屋になった御蔭（おかげ）である。

人生意気に感ずとか何とか云う。変り物の余を変り物に適する様な境遇に置いてくれた朝日新聞の為めに、変り物として出来得る限りを尽すは余の嬉（うれ）しき義務である。

底本：「筑摩全集類聚版　夏目漱石全集　10」筑摩書房
１９７２（昭和47）年１月10日第1刷発行
初出：「朝日新聞」
１９０７（明治40）年５月３日
入力：Nana ohbe
校正：米田進
２００２年５月10日作成
２００３年５月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。